

学校と市民館による生きた学びの創造

社会教育 研究会議

研修員 小針 マサ子（川崎市立日吉中学校）

佐藤 昌平（川崎市立荻宿小学校）

朝野 正治（川崎市立下布田小学校）

長田 俊一（幸市民館 日吉分館）

岡本 剛介（中原市民館）

松本 勝代（多摩市民館）

指導主事 杉本 真智子

はじめに

1 学社連携・学社融合とは

教育には、大きく分けて「学校教育」と「家庭教育を含めた社会教育」の二つの領域がある。それぞれ独自の目的と方法を持ち、長年独自に発展が図られてきた。近年「生涯学習」という教育理念の広がり、この二つの教育を体系的・総合的にとらえることを求めている。平成3年4月に中央教育審議会は、生涯学習社会の具体的な在り方を「社会のさまざまな教育・学習システムが相互に連携を強化して、生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果を評価するような生涯学習社会を築いていくことが望まれるのである」¹⁾と示している。そのためにも、今求められていることは、体系的・論理的な学校教育と実践的で応用的な社会教育のよさを相互に生かした連携・融合、つまり、学社連携・学社融合なのである。生涯学習という理念の具体像として示された学社連携・学社融合は、学校教育及び社会教育のそれぞれが成長、充実すると同時に、新たな学びを生み出し、それによって、より多くの学びが得られる。その結果、生涯学習社会が実現され、我々は学びに支えられた充実した人生を送ることができるのである。

- 学社連携・学社融合の違い -

学社連携
学校教育・社会教育のどちらか一方に主体があり、その一方が自らだけ行うよりも高い教育・学習効果を得るために、もう一方の教育・学習作用を取り入れる状態。その活動は、どちらかの評価の対象としかならない。
(資源交換) 図1

学社融合
学校教育・社会教育の双方に主体があり、それぞれの教育効果を上げるため、共に他者の教育・学習作用を取り入れる状態。その活動は、両者の評価の対象となる。
(同一資源 目的も成果も共有) 図2

図1

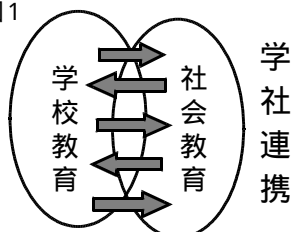
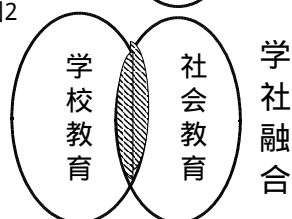


図2



学校教育と社会教育の両者の特性を生かしながら両者の機能を相乗的に作用させ、より望ましい教育・学習を児童生徒や大人に提供していく。このような学校教育と社会教育が相互にかかわりながら、より豊かな教育・学習を生み出していくためには、学校教育・社会教育のそれぞれの教育分野だけを見つめていく考え方ではなく、生涯学習の視点に立って教育・学習を総合化・体系化していく必要がある。学社融合の学びは、児童生徒・保護者・地域の人々・教師など、すべてを包み込んだ協働学習 (collaborative learning) をめざしている。

1) 中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」平成3年4月

主題設定の理由

研究主題「学校と市民館による生きた学びの創造」について

本研究を推進するに当たり、学校と連携・融合が可能な社会教育施設として、地域における生涯学習の拠点である市民館が考えられた。市民館は、地域の人々の学習を援助し、高齢化社会、高度情報化社会への対応など、社会の変化に対応して幅広く事業を展開している。そこで、研究の視点を地域社会の重要な構成要素である学校と市民館に着目し、その連携・融合を「生きた学び」に求めた。

「生きた学び」について、本研究会議では以下のようにとらえ、研究主題を「学校と市民館による生きた学びの創造」と設定した。

「生きた学び」とは、子どもと大人の双方が共に「学びの主体」であり、大人の学びと子どもの学びが対等であり、互いにかかわり合うことで互いの学びの質を高めていくといった学びの有り様。

－ 学校と市民館のよりよい関係 －

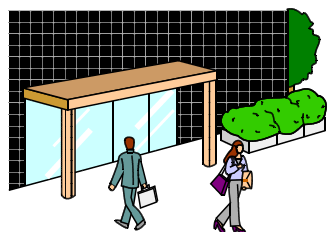
市民館

川崎市の「市民館」は、地域における生涯学習の拠点となる社会教育施設であり、現在、市内各区に本館が7、他に分館6が設置されている。市民館の事業として、市民グループからの企画提案に基づいた「市民発～市民へ」という学習活動が始められており、こうした学習が地域社会の人間関係を豊かに耕してくれることが期待されている。そうした中で、地域社会の重要な構成要素である学校と市民館とのつながりを探ることは、これからの市民館活動を考える上で、重要な視点になるとと思われる。

学校

学校は、総合的な学習の時間や教科学習の充実を図る過程で、家庭や地域そして社会教育施設がもつ豊かな力を認識し、学社のつながりによる学びを積極的に進めている。しかしその学びは、学校が主体の連携が多く、「片方がもう一方の学びに奉仕する」状況にとどまっている例が多く、学びの質や持続性という点では十分とは言えない。市民館との協働学習は、子どもたちが広い範囲で学習の場を得ることができるとともに、自分たちの地域を再認識し地域社会の中で育っていくという意識を高めることができる。

生きた学び



おとな

共に学びの主体

- ・ 対等な学びの関係
- ・ 学びが互いにかかわり合う
- ・ 互いの学びの質を高める

子ども



研究の内容

1 研究の方法

(1) 先行研究から

本研究会議では、研究主題を受け、学社融合の考え方を明確にし、「学社融合」に期待することを話し合い、共通理解を図った。

学社融合の捉えと学社融合に期待すること

現在、「学社連携」という言葉が定着し、大半の学校で地域の学習資源の活用や地域住民に対する学校施設の開放などが進められている。これまでは、主に学校が主体となり、総合的な学習の時間や道徳及び特別活動においての「地域の有識者の講演」「地域での職業体験」などが進められてきた。これらは、地域の教材化や地域に開かれた学校づくりという点で、これまでになかった学校と地域社会の関係を深めていったと評価することができる。しかし、学校教育だけでなく、学校教育と社会教育の両者が、それぞれの学びを互いに求め合い、その学びが重なり合っていたとき、これは、学社連携から学社融合への転換と見ることができる。

学社連携の進んだ形態である「学社融合」は、子どもを育てる方向の共有化と活動の協働化という作用で、学校教育を充実させることはもちろんであるが、児童生徒のための教育や学習が地域においても充実される。これは、児童生徒の生きる力が学校だけでなく、地域においても育成されることになると期待できる。

学社融合の活動は、一方で、大人の学習活動も活性化する。それは、新たな学びの有り様を通して、大人と子どもが同じ地域でつながり合う「学びの共同体」と言えるものではないだろうか。学びの共同体においては、「次代の育成」や「価値の受け継ぎ」の営みもまた行われて子どもは成長する。そして、やがて大人として、再び学びの共同体の環に加わっていくといった、「学びの循環」がそこには生まれてくるのが期待できる。

そこで、具体的に学社融合の推進によって期待される力として、以下の三つの柱を考えた。

児童生徒の学習の機会が充実し、拡大され、「生きる力」の育成につながる

学校教育では、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決していこうとする能力」や「自らを律しつつ人と協調し、他者を思いやる心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康と体力」を「生きる力」²⁾と定義し、育成することが求められている。子どもたち一人一人の課題に対応し、個に応じた指導を充実させるためには、学校教育における学習を多様化する必要がある。そのためには、学校だけでなく、地域においても多様な教育や学習を体験できるようにしていきたい。学社融合は、児童生徒が学校だけでなく、地域においても「生きる力」を培うための主体的な学びができる地域社会をつくり出すと考える。学社融合によって、学校教育の場だけでなく、社会教育の場においても、児童生徒の人間形成の上でも、また知識獲得の上でも、様々な学習に取り組むことが可能となり、その学習はより一層拡大されるのである。

既得の知識や技術の向上につながる

学社融合にかかわる大人たちは、学校教育と連携・融合することによって、自分たちの学びに子どもたちから新たな視点がもたらされるため、既得の知識や技術を向上させ、自らの学習活動を充実させようとする。大人にとっての学社融合は、子どもを媒介とした学びのネットワークを広げ、地域における学校を身近に感じ、自分たちの学びの向上へとつながるのである。そして、その学びは更に地域社会で生かされていくことになる。

生涯学習社会の形成につながる

社会の変化や発達著しい現在、生涯にわたる学習が必須となり、生涯学習社会の形成が叫ばれている。地域の人々と子どもたちの協働学習による「学校と市民館による生きた学び」は、子どもたちを含めた地域社会へと広がり、その地域の生涯学習の基盤になっていくものと期待する。

2) 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第1次答申)平成8年7月

(2) 研究の仮説

市民館のプログラムと学校の学習活動から協働学習を立案し、実践していくことによって、その有効性を検証する。大人と子どもの双方が学びの主体となり、学習を展開していったとき、そこには生きた学びが生まれると考え、以下の仮説を設定した。

仮説：市民館の担当職員と学校の教員が協働プログラムを開発することで、大人と子どもの双方の学びが育ち、そこには「生きた学び」が生まれる。

(3) 協働学習プログラムの開発

学校の教育は、大まかにいえば定められた教育内容を、いかに効果的に学ぶかという点に重きが置かれている。一方、市民館での学習は、「何をどのように学ぶか」はコーディネーター役の市民館職員のプログラミングによるものもあるし、学習者である市民自身がプログラミングし、職員はそれを側面から支援する形、または両者の共同作業になる場合など、様々である。

学校と市民館の両者が、そのもてる条件・資源をすり合わせ、重ねるとはどのようなことを考え、以下の視点で「生きた学び」につながる協働プログラムを開発する。

- 視点1：大人と子どものそれぞれに学びがある。
- 視点2：大人と子どもの学びが対等で、双方向性がある。
- 視点3：大人と子どもの学びが結び付くことに必然性がある。
- 視点4：価値の受け継ぎや次代の育成といった「学びの循環」が見られる。

(4) 協働学習プログラム実施計画の立案

実施計画の立案に当たっては、これまで川崎市で取り組んでいる「学社連携・学社融合」事業での課題を振り返り、課題を解決していく手立てを考えながら進めていくようにした。市民館で学んでいる自主学級グループには運営計画があり、学校には指導計画がある。両者のねらいや計画を照らし合わせ、市民館職員と学校の担当者同士が、いつ・どこで・どのように大人と子どもがかかわり合っていくかを具体的に検討し立案に当たった。協働学習における大人と子どもの両者のねらいを明確にするとともに、そこから生まれる「生きた学び」をどうとらえるか考え、検証を進めることとした。

川崎市の学社融合・連携とその課題³⁾

《「学」側の問題》

- ・学校外の教育に関する情報が少ない。
- ・学校には年間予定があらかじめ組まれていること、また学習の進捗の関係から、自らの都合を中心に相手との調整を図ろうとする傾向がある。
- ・学校側が自らの学習について主体的になるのはよいが、その結果、相手に下請け的なかわりを求めてしまう傾向にある。

《「社」側の問題》

- ・社会教育施設においては、学校教育の制度上の制約がなかなか理解されず、学校は身勝手だと感じている部分がある。
- ・社会教育施設にとっては、自分たちが今抱えていることで精一杯で、学校教育と融合・連携して、一緒に何かをしようという意識が薄い。また、その必要性を感じていない。
- ・地域社会の立場からは、学校を支援したい気持ちはあるが、何をどうしてよいのかわからない。

3) 川崎市総合教育センター研究紀要 「学校が生きる 地域が生きる 施設が生きる」平成14年度

2 協働学習 (collaborative learning) の実践

(1) 中原市民館とA小学校のプログラム

検証授業 A小学校 6年生 総合的な学習の時間「自然エネルギーを使ってビオトープをつくろう」
検証授業のねらい

大人の学び

- ・自分たちの学んだことを、次の世代に伝えるために、新たに学習を深める必要が出てくる。
- ・子どもたちに自分たちの思いが伝わることが、更に学習を進めるエネルギーとなる。

小学生の学び

- ・ビオトープづくりの計画を大人目で見てもらうことで、足りない部分が補える。
- ・環境に対して、真剣にかかわろうとしている大人の姿を見ることで、自分たちのやっていることが、無駄でないことを知る。

<生きた学びをどうとらえるか>

- ・お互いに学習していることが、自分の中だけで完結するのではなく、お互いにかかわり合って深まっていく。
- ・市民館事業「水を通して環境を学ぶ」で学習したことが、総合的な学習の時間でも生かされる。

コーディネーターとしての役割

学校側としては、

- ・学校での学習は市民館の事業とは切り離れた形で、オプションとして行う。
- ・学校では、市民館の事業の紹介をし、子どもが参加可能な学習内容のみ参加を促していく。

以上の2点を考え、事前の打ち合わせをもった。そこで、学校としては授業の中で、「井田山のビオトープについての解説」と、「自然エネルギーを生かすためのソーラーッキング」、そして「ビオトープについての質問」を市民館に依頼することにした。また、市民館事業への子どもの参加には、担任が引率者として子どもを引率する形をとった。

市民館側としては、学校と「水を通して環境を学ぶ」チームとの橋渡ししと、そのための場の設定を行った。その中で、今年だけでなく継続してビオトープづくりに取り組むことなどを提案した。また、市民館事業への子どもの参加に関する調整を行った。

検証授業の進め方

7月終わりに、2学期を見通すために導入の時間を1時間設けた。理科の「生物と環境」のまとめをしながら、「大きな範囲でなく、身の回りのことで環境を見直すことができないか」と投げかけた。その中から、ビオトープが出てきた。そこで、2学期からビオトープに取り組むこととし、その学習に役立つということで、市民館事業に参加申し込みを行い、1回につき平均4～5名の子どもが参加することができた。9月から、本格的な学習が始まった。

第1次 井田山見学をしよう (2時間)

ビオトープづくりというのが、子どもの頭にあったので、まずは実際のビオトープについて見学をして、課題をもつことから始めた。当日は雨天であったが、悪天候の中、来てくださった「水を通して環境を学ぶ」チームの人の思いに、子どもたちも感じるものがあったようである。



第2次 どんなことができるか調べよう (2時間)

学校に戻ってきてから、話し合って以下の4つのグループに分かれて調べを進めることにした。

- ・池や水の浄化について
- ・鳥が来るような工夫
- ・水生動物
- ・植物

主として、図書資料やインターネット等で調べを進めた。その結果、それぞれの疑問が出てきた。



第3次 ソーラーエネルギーの活用と、ピオトープについて質問をしよう (2時間)

ソーラーエネルギーを利用してピオトープの循環を考えていた。A小学校には、屋上にソーラーパネルが設置されている。ただ、これまではあるというだけで、学校の照明の一部には使われていたものの、活用はされていなかった。そこで、そのソーラーエネルギーの活用とピオトープを結び付けることを考え、「水を通して環境を学ぶ」チームの方に来ていただき、実際にソーラーキッチンの実演をしていただいた。曇天である場合に備え、2日間を予定していたのだが、両日とともに曇天だったため、次の機会に予定していたピオトープについての質問をすることにした。質問の後は、給食も一緒に食べながら話していただいた。その話の中の「自然でないものは、ピオトープには使わない。」という考えは、多くの子どもたちに影響を与えていた。



第4次 どんなピオトープにするか調べを進めよう (4時間)

4つのグループで再び調べを進めた。調べを進めながら、それぞれの部分からピオトープについてアプローチをしてきた。そして、まず自分自身で設計図にまとめ、その設計図をもとに全体で話し合った。それぞれの立場だけでなく、お互いの話を聞き合いながら全体を考えて決める必要性を子どもたちも感じていた。

第5次 模造紙に設計図をまとめよう (4時間)

話し合って決まったことをもとに、1/2サイズの模造紙に設計図を作った。それぞれのグループによるアイデアをまとめて、模造紙に書き込んだり、紙に描いたものを貼ったりして作った。できあがったものを市民館に持ち込んだ。一度「水を通して環境を学ぶ」チームの人に見てもらい、今後のピオトープづくりの見通しについて話し合うためである。



第6次 模型を作ろう (4時間)

模造紙による設計図をもとに、ブルーシートに土を盛り、模型を作った。できあがった模型について、市民自主学級「水を通して環境を学ぶ」の講座の中で提案をし、意見をいただいた。この時に大人の方々からいただいた意見をもとに、学校に提案することとなった。

市民自主学級の主催者であるB氏からは、この提案について以下のような感想をいただいた。



風力発電のしかけ

A小学校のピオトープを残そうとする6年生の子どもたちが、課題別グループごとに自主的にいろいろと調査し、その結果をまとめたり、こんなピオトープにしたいという夢を模造紙いっぱいに表示して見せてくれたりしました。子どもたちの一生懸命なすばらしい発表を聞き、参加した人たちにとっては大変感激的でした。大人顔負けの今回の研究発表が活かされてピオトープが実現し、次に続く子どもたち・後輩たちへと引き継がれていくのです。これからは、このピオトープを支えてくれる地域の人たちとの交流が、一層大切になってくると思います。

考察

「わたしたちの学校A小学校では、ピオトープをつくらうとと思っているけれど、井田山のいろいろなところが、つくるときの勉強になりました。」「身近な水の水質調べをしたことで、水質などに興味をもてたので、これからもそういうことを考えようと思いました。」など、子どもからは、市民館自主学級で学習したことが、総合的な学習の時間に活かされている感想が多い。

自主学級の方は、来年も継続してピオトープづくりにかかわろうと考えていることから、「自分たちの活動が活かされている。」ととらえているようである。

この協働学習プログラムは、今後も継続して取り組まれる。ピオトープを通して、自主学級グループの大人だけでなく、保護者や地域の大人も一緒にこの活動が進んでいったらと考えている。今後、子どもたちがどのように発信していくかを支援していくことが大切と考える。今回のプログラムの第6回は、まさに連携から融合へと転換していった瞬間だったととらえられる。

問題点としては、以下の点が挙げられる。

- ・年度途中の計画であったため、学校側での予算の問題で、なかなか大がかりな学習が組みにくい。
 - ・学校の活動はどうしても平日となるため、社会人の方にわざわざ休みをとってもらわなければならない。
 - ・学校の学習と市民館自主講座の両者のねらいに整合性があったかという疑問がある。
 - ・学校の窓口が担任のため、管理職との意思疎通が難しい。 などである。
- 今回の学校と市民館による協働学習は、これまででない学習の深まりを感じさせるものであった。市民館と学校にできたパイプは、これからも大切にしていきたいと感じている。

協働学習を行った市民館の事業計画

平成16年度中原市民館市民自主学級「体験を通して環境を学ぶ」事業計画書

○開催及び時間 平成16年9月11日～平成17年2月26日(毎回土曜日)

○会 場 中原市民館ほか

○対 象 小学4年生以上の市民 20名

○実施の目的 暮らしの中で使っている水がどのように循環しているかを中心に、大人と子どもが体験学習を通じて問題意識をもち、環境改善につなげる。

学習プログラム

回	月・日(曜)	学習課題	学習内容	学習方法	講師等	会場
1	9月11日(土)	水とくらし	水とくらし、オリエンテーション	ワークショップ	企画運営委員	第3会議室
2	9月25日(土)	水処理のしかけ	くらしの水がどのように処理されているか	等々力水処理センター見学	等々力水処理センター職員	等々力水処理センター
3	10月2日(土)	水と生態系	井田山のピオトープ、水の検査、水の浄化、雑草について	市民健康の森・井田山	井田山・中原区市民健康の森を育てる会メンバー	井田山
4	10月9日(土)	身近な水の水質	水をくくってみよう	水の検査	企画運営委員	実習室
5	11月20日(土)	水質検査	川崎市公害研究所での水の水質検査の見学	川崎市公害研究所見学	川崎市公害研究所職員	川崎市公害研究所
6	12月25日(土)	環境グループとの交流	井田山での落ち葉かささと水浄化についてはなし	環境グループとの交流	井田山・中原区市民健康の森を育てる会メンバー	井田山
7	1月29日(土)	学校のピオトープ	小学校のピオトープと自然エネルギーの利用	小学校のピオトープ作り参加	市民団体会・グループ員同窓会チームメンバー	高宿小学校
8	2月26日(土)	水問題のまとめ	生活と水の問題と今後の方向についてのまとめ	ワークショップ	企画運営委員	第1会議室

(2) 幸市民館日吉分館とC中学校のプログラム

検証授業 1

選択社会 「3年公民的分野」～人権 「差別」～ (「カラカサン」の活動から)

2年 総合的な学習の時間 「地域の方の生き方に学ぶ」 ～「カラカサン」の活動から～

検証授業のねらい

大人の学び

- ・同じ地域で、多くの差別や偏見と戦っている人々の実情を子どもたちに伝えることで尊厳を回復する。
- ・授業を通し、子どもたちに差別をしない社会について考える機会を与えることができる。

中学生の学び

- ・「カラカサン」を通し、困難な中、必死に生きている人たちの思いに触れ、今の自分を振り返り、これからの生き方を考えるきっかけとなる。
- ・日々様々な活動や学習を続けている団体なので、その内容は幅広く、子どもたちに強く訴えるものがあり、授業内容が深まり、物事を深く考えるよい機会となる。

<生きた学びをどうとらえるか>

カラカサンスタッフにとって、自分たちが仲間と共に学んできたものを子どもたちに伝えることによって、更にエンパワーメントされる。また、子どもの発想や感覚に触れることにより、自分たちの学びの幅が一層広がる。カラカサンの活動や「差別」について、子どもたちが家庭で話をしたり家族と共に考えたりし、やがて大人になったとき、次の世代にそれを伝えていく。学校・家庭・地域社会が一つになった新たな学習の姿をめざしたいと考えている。

「カラカサン」とは

フィリピンのタガログ語で「ちから」という意味。「カラカサン」は、移住女性のためのエンパワーメントセンターで、様々な暴力や差別を受ける中で、「ちから」を奪われた移住女性たちが、内なる力と尊厳を回復することをめざして、2002年12月に設立された。そこでは、移住女性への相談・カウンセリング・暴力被害女性へのフォローアップケア・教育・参加型調査・ネットワーク・行政への提言活動などに取り組んでいる。働く女性のための託児施設も運営している。その費用のほとんどは、会員の会費や寄付・バザーの収益金などである。

検証授業の進め方

プログラム計画

時	学習内容	生徒の主な活動
1	地域で活動している方々	・「カラカサン」の活動内容や目的、外国籍の現状を知る。
2	「カラカサン」の活動・「差別」の現状を知る	・「カラカサン」の方による授業。活動に至る経緯、活動内容、外国籍の人が受けている「差別」についての実情を聞く。
3	住みよい社会にするには、どうすればよいかを考える。	・なぜ、そのような現状や差別が起こるのか、どうすれば、外国籍の人が幸せに暮らせるのか、班で意見を出し合う。 ・各班の意見をまとめ、発表する。 ・「カラカサン」の「子どもたちに一番伝えたいこと」「わかってもらいたいこと」を聞く。
4	「カラカサン」の方々の生き方に学ぶ	・「カラカサン」の活動や取組についての感想や意見をまとめる。差別をなくすためにできることは何か、意見を再度掘り下げ、「カラカサン」が伝えなかったことは何か考える。

考察

「カラカサン」という市民団体が、C中学校区の地域で活動していることや多くの差別と闘っていること、生きるために多くの困難を抱え、それを乗り越えようとしていることなどを生徒が知ることによって、現実の話に驚くと同時に、今の自分を振り返り、一人一人が「自分も何かをしなくては。」といった課題をもち、差別のない社会を考えるきっかけとなった。

「カラカサン」スタッフたちは、大人として今直面している問題や課題を子どもたちに伝えていったが、「中学生がこんなに真剣に話を聞き、考えてくれるとは思っていなかった。将来、子どもたちが大人になったとき、私たちのことを少しでも思い出し、差別をしない社会について考えてくれたら嬉しい。」という感想があった。自分たちの活動を発信し、理解してもらえたことは、学び続けることの充実感につながり、大きな喜びであった。子どもたちに伝えるに当たっては、資料を作成するなど、わかりやすくするための工夫をしていったが、そういった過程が、自分たちの活動を振り返る機会にもなっていた。

今回の検証授業を終えたばかりでは、どのように地域の生涯学習社会の構築に結び付いていくか、すぐに結果が出るわけではない。しかし、同じ地域で活動している「カラカサン」と中学生の今後の交流の中で、中学生が外国籍の人への差別や暴力について考えたことがどのような形で表れてくるか、長い目で見つめたい。

検証授業 2

2年 総合的な学習の時間 「地域の方の生き方に学ぶ」 ~ 「日吉郷土史会」による地域歴史学習 ~
検証授業のねらい

大人の学び

- ・自分たちが学んできた地域の歴史を次の世代に伝えられる。
- ・人に教えるという新たな学びにつながる。
- ・日吉分館での活動を多くの人に発信し、理解してもらえるきっかけとなる。
- ・子どもたちと一緒に活動を体験することで、学校を身近に感じ、地域の子どもたちに対する愛着がわいてくる。子どもたちから活力を得るとともに、この地域で一緒に子どもたちを育てていくという思いがでてくる。

中学生の学び

- ・地域の歴史について、より詳しい知識を得ることができる。
- ・地域の人々との新たななかかわりが生まれる。
- ・地域に様々な生き方をしている人がいることを知ることができる。また、地域の人々が一生懸命学び、教える姿をみて、授業をもらおう、学習するということの意味を子どもが考えるようになる。

<生きた学びをどうとらえるか>

地域の歴史について、深く掘り下げ学んでいる大人の姿は、子どもたちの学習意欲を喚起するとともに、その姿に触れること自体が、子どもに生きることを学ばせてくれるように思う。大人と子どもの両者が、学びを共有し、一緒に体験活動を進めていくことから、年代を超えた新たななかかわりが生まれる。今回の協働学習では、自分たちの地域を見直し愛着を抱き、子どもが大人になったとき、次の世代にそれを伝えていくといった学校と家庭、そして地域社会が一つになった学習の姿をめざしたいと考える。

検証授業の進め方

プログラム計画

時	学習内容	生徒の主な活動
1	地域学習の内容・意義	小学校の復習、地域学習の意義と今後の活動内容の説明
2	日吉の地域にはどんな歴史があるのだろうか	「日吉郷土史会」による地域の歴史に関する話を聞く。 郷土史会には、日吉地域にまつわる話を、次回のコース別に五話用意しておいてもらう。
3	興味ある地域を探そう	前時の話を聞き、「日吉郷土史会」のプログラム5コースから興味をもった調査コースを選び、調査グループに分かれる。 切り崩された加瀬山の調査 加瀬山古墳群 鎌倉街道について 小倉用水について(丸池) 操車場の歴史
4 5	私たちの地域にはどんな歴史があるのだろうか	「日吉郷土史会」によるコース別事前学習 コース別に資料などを使い、地域の歴史や変化、歴史にまつわる話などを聞く。興味をもった所やどこを中心に現地見学や調査をするのかを考える。
6 7 8	地域を歩いてみよう	「日吉郷土史会」による史跡見学・学習 実際に現地を歩き、目で見ることにより、前時までの学習の内容を確認する。興味・関心をもった所をメモしたり、写真に撮ったりして、資料として活用する。
9 10	学習したことをまとめよう	史跡見学や事前学習で学んだこと、感想などをまとめてみる。 各グループでテーマを幾つかに絞り、グループ発表の準備をする。
11 12	学習の成果を発表しよう	「日吉郷土史会」を交えての発表会 郷土史会には、生徒の発表を見ていただくと同時に、説明や補足、質問事項などに参加していただく。



考察

一人一人の課題を解決するために、地域の大人が一生懸命になってくれている姿に感動し、授業に向かう姿勢も真剣であった。また、子どもたちは、地域の高齢者が自分の知識を伝えるだけでなく、更に今も勉強を続けている姿を見て、地域への関心や愛着が高まった。また、一緒に見学学習をすることによってかかわりが深まり、そのかかわりは、学校外でも見られるようになっていった。郷土史会の方々からは、「自分たちが日頃学んでいることが伝えられてよかった。」「子どもたちが歴史に興味をもってくれたし、何よりも学校が身近に感じられるようになった。」という感想が多

かった。大人のみの学びを子どもが理解できるまでに絞り込む過程は、自分たちの学びをもう一度見つめ直すこととなった。また、「子どもたちにわかりやすく教え、伝える。」という教える技術そのものが学びとなった。今回の協働学習における学びを通して、自分たちが日頃同年代だけで学習していることを、次世代に伝えることができたという充実感や達成感にもつながった。

「地域の歴史を伝える。」「地域の歴史を知る。」といった両者の学びは、「地域の歴史を守り伝えていく。」といった共通の学習目標を達成したと考える。地域の高齢者から受け継いだ今回の学びを、子どもたちは次の世代に伝えていくことと思う。

今後の課題

- ・授業の中のどの場面でどう取り入れていくかを、よく考えて協働学習に当たる必要がある。
- ・両者のめざすものがうまく授業に取り入れられているかどうか、検討する必要がある。
- ・講座責任者と市民館担当者、学校担当者との打ち合わせ時間の調整や確保が大切である。
- ・双方で十分に事前学習を行い、授業に臨む必要がある。
- ・この活動は、続けていくことに意味がある。そのためには、誰でも利用できるシステムづくり(学校内に担当者を置くなど)をする必要がある。

今後の活動予定

- ・3学期、2年総合的な学習の時間の続き。
- 日吉台地下壕の見学
- ・来年度3年、卒業時特別時間割
「地域で活動する人々」(環境学習)
鶴見川・矢上川流域の環境調査
地域で活動する人々と現地見学、調査の予定



鎌倉街道について



小倉用水について

日吉分館市民自主学級				
続：私たちのふるさとを語ろう知ろう				
日吉郷土史会 注：○印は見学				
回	月日	テーマ	内容	講師
1	5. 21 (金)	新編武蔵風土記稿 を読む その1	日吉地区の村々について	相模民俗学会会員
2	6. 5 (土)	中原街道界隈を訪ねて	常楽寺(マンガ寺) 春日神社	市民ミュージアム 学芸員(案内)
3	6. 18 (金)	新編武蔵風土記稿 を読む その2	日吉地区の村々について	相模民俗学会会員
4	7. 3 (土)	東海道川崎宿を歩く	資料館、本陣、脇本陣ほか	大師ボランティア ガイドグループ
5	7. 16 (金)	日吉村の合併と近代化	政治の流れ等について	日吉地区町内会連絡協議会
6	8. 20 (金)	道祖神信仰について	日吉村とその 周辺を中心に	郷土史研究者
7	9. 4 (土)	了源寺を訪ねて	御会式・軽部五兵衛の墓 七曲り坂など	了源寺
8	9. 17 (金)	操車場の歴史	加瀬山の切崩しなど	郷土史研究者
9	10. 16 (土)	鎌倉道を歩く	日吉駅から岩窟堂 などをへて北加瀬まで	郷土史研究者
10	11. 19 (金)	治水の歴史	小倉用水池・県水堀 などについて	日吉地区町内会連絡協議会
11	12. 17 (金)	南武線の歴史	砂利鉄道からの始まり	郷土史研究者
12	7. 1. 21 (金)	天領と地領・助郷制度	天明の大飢饉なども	市民ミュージアム 学芸員
13	17. 2. 19 (土)	寿福寺を訪ねて	如意輪観音と地藏尊 力石など	寿福寺
14	17. 2. 25 (金)	郷土の民話	小倉池(丸池)、影向寺 北加瀬大入道などの話	日吉郷土史会
15	7. 3. 18 (金)	古文書を読む 加瀬の翠嵐	江西三十八勝詩歌	郷土史研究者

協働学習を行った市民館の事業計画

(3) 多摩市民館とD小学校のプログラム

検証授業 6年生 総合的な学習の時間
検証授業のねらい

「知ろう、認めよう、伝えよう 互いの文化」

大人の学び

- ・地域の遊び場マップづくりを通して、中野島の町を知り、これからの町を考えたり、町のよさを発見したりする。
- ・子どもたちとの交流から、子どもの視点に気付き、地域理解を深める。
- ・子どもの学びを深めるためにはどうしたらいいのか、共に学ぶということはどういうことかを考える。
- ・子どもの自発性を最大限尊重し、子どもの気付きを待ち、大人ができることを考える。

小学生の学び

- ・地域に目を向け、身の回りの文化に触れながら、それを受け継いできた人と積極的な交流を図る。
- ・地域の人との交流を通して、お互いに理解し合い、次代の担い手として地域を愛する気持ちを育てる。
- ・インターネットや書籍などを使った「知る」ということだけでなく、人との対話の中で「知る」こと、触れ合うことで「学べる」ことを体験する。
- ・学びから得た自分の思いを発表し、大人に対してきちんと伝える。

<生きた学びをどうとらえるか>



- ・地域という同じ視点にたって、それぞれの興味関心のある課題に取り組むことで両者の学びは成立する。
- ・子どもたちは大人の話聞き、大人の学ぶ姿勢に触れ、学習内容を知る過程で自らの課題を明確にしていく。また、大人は、子どもたちと学び合うために、子どもの自発性を待ち、一人一人の子どもへのアプローチが大切であることを学ぶといった、子どもと大人の双方向の学び合いができる。

コーディネーターとしての役割

学校側としては、市民館事業が地域開催であったため、双方の打ち合わせや市民館事業のマップづくりの作業についても場の提供をした。2学期は全市的な行事や校内の行事が多い。その中で協働プログラムのために子どもの学習時間を確保するための調整が必要だった。検証授業実施に当たっては、その日程・場の確保について他学年との調整が必要だった。6年生の全市的な行事と重なり、何度か日程の変更をお願いした。年代別マップづくりを学校で行っていたので、教職員の理解は得やすかった。

市民館側としては、協働プログラムの実施に当たって、学社融合をめざしている現況とその意義についての理解を参加者に求めた。また、市民館事業の企画運営委員の方々と学校側との連絡調整を行った。

双方の役割として、それぞれの学びの進行が流動的であったため、それぞれの学習についての進捗状況を報告し合うこと、交流（検証授業）の日程を調整すること、発表の仕方について計画を立てることなどで頻りに連絡を取り合った。回を重ねるごとに、確かな成果を求める大人の学習が充実していったため、子どもとの協働プログラム実施に当たっては、当初の想定していた交流よりさらに広いかかわり方が求められ、よりよく学び合うための調整が必要であった。

検証授業の進め方

まち歩き

<大人>

- ・子どもの視点に気付く。
- ・子どもからの「知りたい」に寄り添う。

<小学生>

- ・大人の話聞く。
- ・聞きたいことや知りたいことを明確にする。



大人からの発信

<大人>

- ・3つの世代別に作成したマップの発表。
- ・世代ブースを作って子どもたちに自由に見ってもらう。
- ・子どもたちのつぶやきを聞き取る。
- ・「私たちはこうだったのよ。」を子どもたちにいったん受け止めてもらう。

<小学生>

- ・昔の地域の様子について、知りたいことを質問する。
- ・大人の視点を感じ取る。

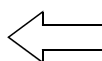
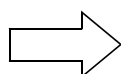
子どもからの発信

<大人>

- ・まち歩きや大人からの発表を経て、子どもたちのそれぞれの課題の深まり方とのつながりを見る。

<小学生>

- ・布で作った地域マップを発表する。
- ・課題別に歩いてわかったこと、体験活動をしてわかったことなどをまとめる。
- ・この学習を通して今、自分たちができることを考える。
- ・「願い」「残したいもの」を伝える。



地域への発信

- ・子どもと大人と一緒に考えるパネルディスカッション(子どもまつりでの実施)をする。
- ・これまでの交流から話し合いのテーマを設定し、代表者による意見交換をする。
- ・多くの参観者とともに、これから地域の中で自分ができること、地域に対して思うことを「夢のしゃぼん玉」にしてマッピングすることで、課題を共有する。

予想される学習活動内容

自国文化理解に対する課題をつかむ

知ろう、認めよう、伝えよう 互いの文化

3年生での地域
学習を思い出す。

地域の歴史を考える。

無形の文化を見付ける。

行事を思い起こす。

地域のよさを伝えていく意味とその方法を考える。
《自分たちの思いが効果的に表せる内容・方法を》

統一課題に沿って一人一人が課題をもつ。

自然や遊びの紹介

伝統文化や名人の紹介

歴史や言い伝えの紹介

将来の地域、または
夢の地域を紹介

課題に沿って活動計画を立てる。

交流活動の開始

活動中の人とのかかわりを記録する。

遊び場のページ

地域、日本の伝統文化のページ

季節の行事のページ

夢の町づくり提案
のページ

不特定多数の相手を意識した表現を考える。

D地域マップを発表しよう。

学んだことを今後の生活に生かしていく。

市民館自主企画事業計画

市民自主企画事業「なかのしま遊び場マップ」プログラム

会場 主に中野島会館、D小学校

対象 中野島地区周辺にお住まいの方及び関心のある方

	月・日(曜)	学習課題	学習内容	学習方法
1	9月 9日(木)	学習目的を理解する	<u>プログラム説明、自己紹介</u> ・まちづくりの意義について話を聞く ・マップ作成の方法と3世代のグループ分け	講義 話し合い
2	9月16日(木)	まち歩きのなかで3世代それぞれの中野島を知り、マップを作成することでまちの移り変わりを知る	<u>遊び場マップづくり</u> ・まち歩きのポイント確認とまち歩き	話し合い
3	9月30日(木)		<u>遊び場マップづくり</u> ・実際に中野島のまちを歩いてみよう	まち歩き
4	10月 7日(木)		<u>遊び場マップづくり</u> ・まち歩きのまとめとマップ作成 ・色分けルール表の確認	話し合い
5	10月14日(木)		<u>6年生との顔合わせ交流会</u> <u>顔合わせ交流会のまとめ</u> <u>遊び場マップづくり</u> ・マップ作成	話し合い
6	10月21日(木)		<u>遊び場マップづくり</u> ・世代マップの仕上げ <u>交流に向けた話し合い</u>	話し合い
7	10月28日(木)		<u>子どもたちとのまち歩きポイント確認</u> <u>発表しあう内容について確認</u> ・発表者、内容についての打ち合わせ ・世代間のマップ発表と意見交換	話し合い
8	11月2日(火)		<u>子どもたちとのまち歩き</u> ・子ども(D小6年生)と一緒にまち歩きをし、子どもたちの課題に寄り添う	まち歩き
9	11月9日(火)		<u>3世代マップの発表</u> (子どもたちとの交流) ・意見交換、交流 大人と子どもの視点の違い、地域課題の整理、地域の理解を深めるための意見交換	話し合い
10	11月18日(木)		<u>子ども(D小6年)マップの発表</u> (子どもたちとの交流) ・意見交換、交流 大人と子どもの視点の違い、地域課題の整理、地域の理解を深めるための意見交換	話し合い
11	11月20日(土)		学習したことを子どもたちや地域の人と共有することや、今後にかかしていくために発表する	<u>学習の発表</u> ・D小学校こどもまつりでの発表とまとめ
12	12月1日(水)		<u>学習の振り返り</u> ・学びを次につなげていくために	話し合い

は、協働授業

考察

子どもたちは、自分たちでやりたい課題をはっきりさせてから自分の足で解決していく過程で、学習のねらいがより明確になり学習が深まっていった。子どもたちからは、「実際に大人の人たちが、歩いて、公園や遊び場を探したのがすごいと思った。」「マップの色分けが見やすく、今と昔の違いがはっきりとわかった。」などの感想が出るなど、大人の学ぶ姿勢から得るものが大きかった。市民館事業は中野島地区での立ち上げであったので、人材面の情報や子どもたちへの支援が具体的で確実なものであった。協働学習では、年間の事業計画をもとに学校と綿密な話し合いが必要であり、市民館職員のコーディネーターとしての役割が重要になってくるだろうと思われる。市民館事業としては、子どもたちとの交流や学び合いから、「遊び場から見えるまちづくりを考える」という学習のねらいをより深めることができた。次代を受け継ぐ子どもたちと同じ視点に立ち、一緒に地域を考えられる意義はとても大きかった。今回のような協働学習の実施に当たっては、何よりも学校としての主体的な取組が必要だと感じた。大人たちは、子どもたちの学びの状況から、学び合いの必要性を感じ取ることができたが、学校教育への支援という側面に引きずられることも多く、真に対等な関係での学習づくりには至らなかった。学校側と市民館事業の双方が、主題に対するねらいや学習手法についてのプランを明確にもった取組が重要である。

協働学習の実施に当たっては、単に学校教育における学習効果を上げるという意味合いだけでなく、子どもたちもまた地域の一市民として自発的に多様な社会的経験を積んでもらい、それが、結果的に学校での学習にも役立つという視点での取組を求めていきたい。そういった取組が、生涯学習社会の基盤になっていくことと考える。

研究のまとめ

自らの問題意識から出発していく大人の学びは、その学びが進むに従って、そこで得たものを広く周囲と共有していくことを指向する。大人が子どもたちへ学びを発信し、両者が自然とお互いを求め合い、学びを共有するということは、次の新たな学びの糸口へとつながる。子どもたちは、可能な限り学びを追求している大人とのかかわりにより、学習への意欲を高め、広く深く、そして楽しく学習を進めていく。さらに、世代間のかかわりが、地域全体の人間関係のネットワークへと発展していく可能性も考えられた。

今回実践された協働学習プログラムは、大人と子どもの双方に学びがあり、「生きた学びの創造」につながったことが検証できた。平成 17 年 3 月策定された「かわさき教育プラン」の目標は、「人づくり」「地域づくり」といった観点から、「多様化する価値観のなかで、子どもと大人がともに生き、一人一人がいきいきと輝く学習社会を創造する。」「地域の学習のネットワーク化を支援し、地域教育力の向上へつなげる。」の二つの目標を設定している。この目標を具現化していくためにも、「学校と市民館による生きた学びの創造」は、意義のある研究であると考えられる。ただし、協働プログラムを推進していくに当たっては、以下のことを課題としてとらえ、今後進めていきたい。

- 1、学校と市民館の両者の学びを成立させていくためには、それぞれの学びのねらいを照らし合わせ、コーディネーターを中心に、学社間の綿密な打ち合わせの時間を確保する必要がある。
- 2、学校側の体制を整え、学校全体の教職員の理解を得るとともに、誰でも利用できるシステムづくりをし、継続して活動できるようにしていきたい。
- 3、地域教育会議などを通して、市民館の事業プログラムや学社協働での実践事例などを幅広く発信し、各学校や地域に学社連携・融合を啓発していくことが大切である。

学社融合の取組が各地域に広がっていくよう、今後も協働プログラムを開発し発信していきたい。

【参考文献】「子どもを育てる方向の共有化と活動の協働化」鹿沼市教育委員会生涯学習課 1997 年

「家庭・学校・地域の連携・融合のすすめ」国立教育会館 社会教育研修所 1998 年

【指導助言者】山梨学院大学大学院教授 黒沢 惟昭（川崎市総合教育センター専門員）

川崎市立久末小学校長 高尾 寛雄